

家の土壁に、太陽や花、動物などを紅の塗料で描いてある。ネパール東部のジャナクプール市から車で1時間ほど走った村に、少数民族・マイティリ族が住む。

村の少女、サマル・クマリ・ダスちゃん(12)は、4カ月前に花嫁になった。そのせいか、おしゅれた。薄黄色のサリーをまとい、左の鼻にピアス、両腕に腕輪もしている。額中央の髪を生え際も、赤く塗っている。結婚したことを示すしるしだ。

その額をよく見ると、右目の上やけどの跡がある。いすから落ちてけがをした時、村人から勧められて塗った酸が濃すぎて焼けたまま残ったのだ。

マイティリ族の女性は、9歳から14歳までの間に結婚するといふ。母のアスラニ・デビさん(30)が奥から出てきて、そう説明

明日を生きたい

ヒマラヤのふもとから

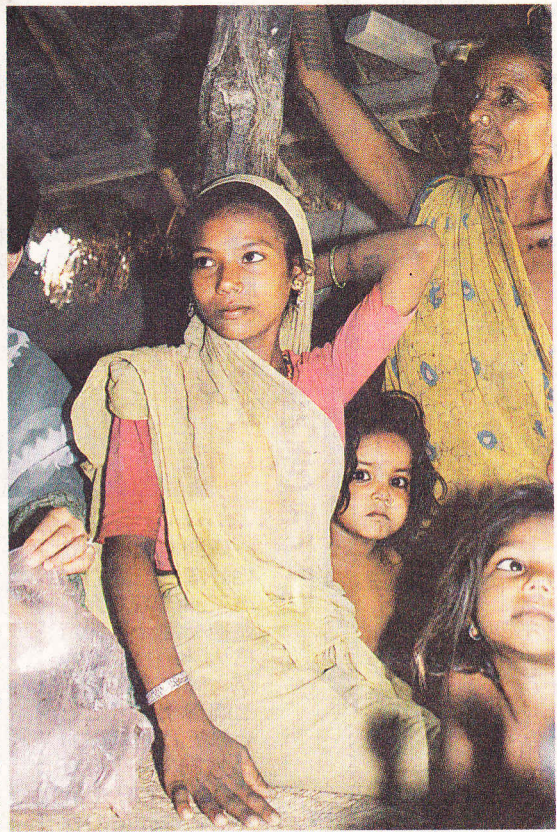
親が決めた相手と早婚



した。相手は親が決めた。女性側はダウリ(持参金)を払う。サマルちゃんのダウリは2500ルピー(1ルピーは約2円)。結婚後は夫が迎えに来るのを待つ。

早い結婚、出産は体によくないのではないか。アスラニさんに質問した。「知っていますよ。でも、いつ親が死ぬか分からない。私が死んでしまつたら、ダウリも払えない。この子も、2年もしたら結婚させたいんです」。そばにいたサマルちゃんの妹、パワンちゃん(10)の頭をなでた。

サマルちゃんは、間もなく迎えにやってくる夫の年も仕事も知らない。結婚式の時、初めて顔を見た。まだ口をきいたこともない。「それが習慣だから」。



「夫のことは何も知らない、顔を見たのも結婚式の日」と話すマイティリ族の幼妻、サマル・クマリ・ダスちゃん。ネパール・ジャナクプール近くの村で

ら」。若い花嫁は、ポツリと漏らした。近くの家に、10歳で結婚したマンジュ・デビ・バスちゃんがいた。1カ月前に結婚した。別の村にいる13歳の夫は、まだ学校に通っている。

「あと3年ぐらいしたら相手も仕事を覚えるでしょう。それまでは、ここで家事を覚えさせる」。母のサガ・デビさんはこう言ったきり、後は押し黙った。

この一帯では、女の子は学校や病院に行かないことが多く、幼くして嫁か

● 病院建設にご協力を

「目に見える援助」を実施するため、今年のキャンペーンは従来の国連機関などへの寄金に加え、ネパール現地で進められている子ども病院建設計画にも協力します。

救援金は、下記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)